

最近、医学教育における教育方法が、大きく変化してきています。これは、日本だけでなく世界中で起こっている出来事です。医学教育は、100人全員が同じ講義室で受講するパターンが一般的でした。30年ほど前からカナダのマックマスター大学から始まったPBL (problem-based learning:問題基盤型学習)という方法がアメリカ、ヨーロッパ、アジアに拡大しています。本学でも昨年の1年生からPBLをスタートさせています。また、今年度からは3年生でも実施しています。

## PBLってなに？

problem-based learning:問題基盤型学習ということになりますが、簡単には、患者の事例(シナリオ)から、学生自身が問題点を見つけ出し、テキストやインターネットなどから情報を得て、学習を進めていく方法をさします。さらにテュートリアルとは、5-8人のグループで、チューターの陪席のもとに、討論や学習を行う方法を言います。一般的には、PBLという材料(ネタ)でテュートリアル(料理法)を行いますのでPBLテュートリアルとまとめて呼んでいます。この方法が開発された最大の理由は、「どのように患者の難問・疑問に対処するのか」という臨床的な問題を解決するための方法をマスターすることが、医師としての将来に役立つという考え方です。そのために細かい知識は自分で勉強し、友人・先輩と討論するというやり方です。

## 実際にどのように学習するの？

5-8人くらいの学生がグループとなります。そこに一人のチューターがいます。挨拶の後に、チューターは学生にシナリオを渡します。そこで、学生達は、司会、書記、ホワイトボード係などの役割分担を決めます。シナリオを一緒に読みながら、問題点、不明な用語などをピックアップします。グループ全体で共同作業を行い、問題点を整理したり情報を集めたり、討論したりします。最終的なまとめをグループの代表者が発表します。

## PBLテュートリアルの最終的な目標は何なの？

主なものとして7つがあげられています。①自己学習能力、②問題解決能力:学習者にとっての学習課題をさしています。临床上の問題解決とは異なるので、導入時には混同しやすいので注意が必要です。③批判的検討能力(クリティカル・シンキング):討論しながら行うことによって多角的な判断ができるようになります。④グループ作業、⑤臨床的推論スキル:単なる医学知識の寄せ集めではなく、知識を有機的に連携させ推論ができるようになる。⑥単なる生物としてではなく、病を持つ人間の事例として学習する。⑦医師としてのプロフェッショナリズムなどがあげられています。

# チューターの役割は何？

通常は、教員が担当しますが、時に大学院生、上級医師が担当することもあります。大きな役割は、学生を勇気付け、討論を活発にし、討論を妥当な方向に導くことで、話題がそれたら元に戻すこと、問題点を明確にすることです。チューターの専門分野でないシナリオのほうが、むしろ良いとされています。最悪なチューター像をまとめます。①遅刻する。(学生には遅刻するなといいいながら、忙しいことは言い訳になりません。)②ミニ講義・解説をはじめる(学生の主体性がなくなります)③内職(忙しくても学生さんの前ではいけません)④学生を評価する(学生の良い点はほめて良いですが、討論の結果が妥当な結論になればOKであり、途中の無知や間違いは評価しません)

# 他の施設のPBLの状況はどうなってるの？

PBL テュートリアルは、カナダの新設マックマスター大学の Anderson と Barrows (バローズ) によって始められました(1969年)。また、Barrows は模擬患者の考案者でもあります。医療面接だけでなく、身体診察(所見)にも応用しています。その後、1985年にアメリカの老舗ハーバード大学で採用されたことから全米、世界中に広まりました。1961年に開学したニューメキシコ大学でも、PBL テュートリアルを採用し、当初は2本立てでしたが、1993年からPBL テュートリアル1本にしています。オランダのマーストリヒト大学(1974年新設)でも熱心に行われています。愛知医科大学と包括的な相互交流を行っている南イリノイ大学も有名です。実は、PBL テュートリアルを開発した Barrows がマックマスター大学から移り、さらに進化させた方法を作り上げています。昨年10月に、副医学部長及び医学教育カリキュラム担当の先生方が本学を視察にみえられました。今年4月には、6年生、5年生、4年生が短期留学に出かけています。実際の様子は、次回に報告していただきます。

# 愛知医大は後れを取っているの？

教育の目標を何に置くかによって手段を選ぶと考えればよいでしょう。単に国家試験をパスすること(当面は目標になりますが)が最終目標であれば、医師になってから本当に困ります。一方、問題解決の方法をマスターするといろいろな場面で応用ができます。このような能力を身につけるにはPBL テュートリアルが最も相応しいと考えられています。日本全国の医学部では、数大学が熱心に行っていますが、他はほぼ同じようなレベルです。南イリノイ大学でもニューメキシコ大学でも旧来のカリキュラムを共存させて、1本化するまでに10年から20年かけて移行している点を考慮しても、急激な改革よりはゆっくり進めた方が無難であると思います。昨年本学にみえた南イリノイ大学の副医学部長もおっしゃっていました。すでに、5月から6月にかけて3年生でPBL2が行なわれており、1年生では、秋にPBL1が行われます。



ディスカッション(写真左)・検索を行なった後、これまで整理した問題点や集めた情報をミニクチャー(写真右)で再確認します。

☆ 次号では、本学と相互交流を行っている南イリノイ大学医学部(SIU)について特集します。短期留学生として派遣され、SIU 2年生カリキュラムを実体験した学生さん達の生の声をお届けします。